



TITLE:

イーディス・ウォートンの『母の償い』における肉体と倫理

AUTHOR(S):

島津, 厚久

CITATION:

島津, 厚久. イーディス・ウォートンの『母の償い』における肉体と倫理. QUEST 1988, 2: 69-87

ISSUE DATE:

1988-03-21

URL:

<https://doi.org/10.14989/87486>

RIGHT:

イーディス・ウォートンの 『母の償い』における肉体と倫理

島津厚久

いわゆる文学史の常識では、イーディス・ウォートンは個人と環境の対立というテーマをもつ風俗小説を書いたということになっている。試みに引用してみよう。

…11歳のころ早くも小説を試みたといわれるが、その後 Henry James と親しく交わり、その影響もあって、主としてニューヨーク、あるいはフランスの上流社会を背景に、個人と社会的因襲との対立について、諷刺的な風俗小説を書き、巧緻で芸術的な作風で知られた。¹⁾

他の概説書の類においても、ほぼこれと同じような説明がなされているといってもよいだろう。

こういう概括はよくまとまっているとはいえ、「性愛の問題」というウォートン文学の大きな特色について言及されていないのはやや不満である。お上品な風俗小説を書く人というのがウォートンの一般的印象なようだが、意外にも彼女は肉欲とか異常性愛の心理などを作品の中に描き込んでいるのである。

具体例を挙げよう。次の文章は「ベアトリーチェ・パルマート」なる断片の一部で父と娘の近親相姦の場面を描いたものである。

しかし、パルマート氏は疲れを知らなかった。……彼の一方の腕は彼女の背中の下に滑り込み、ぐるっと回って再び左の乳房を掴んだ。同時にもう片方の手はゆっくりと彼女の両脚を開き、かつ

て暗闇の中で頻繁に通ったその道を滑り上がり始めた。²⁾

C. G. ウルフの説としてルイスが『伝記』で紹介しているところでは、ウォートンは、近親相姦をテーマにした同名の短編小説を書くためにその雰囲気肌を肌で覚えようという意図でこのようなものを書いてみたのであって、従ってこれそのものを活字にしようという目的はなかった。³⁾しかし、ポルノそのものといってもよいこの文章が、ウォートンの性愛、肉欲への関心の強さを明確に示している。その他、出版された作品を見ても、『夏』では娘の肉体的成熟が官能性豊かに描かれているし、『子供達』では少女に対して本気で愛を感じてしまう男の心理が追求されている。先程名前を挙げたウルフは、『夏』をフロイト流の精神分析で解釈しようと試みている。⁴⁾

このようなウォートンの「性」への関心も、彼女自身の悲惨ともいえる夫婦生活を知ればある程度納得がいく。彼女は1885年に、エドワード・R・ウォートンという男と結婚したが、それまでに母親から満足な性教育を授けてもらえず、ために夫との間で性交渉をもつことができなかった。その欲求不満がもとで夫は発狂し、ウォートン自身も過度の神経障害に悩まされることになって、結局1913年に夫をスイスのサナトリウムに放り込むという形で結婚生活にピリオドを打った。その後、45歳の時に本当に打ち込める恋人ができ、結局は結ばれなかったもののこの時初めて彼女は女としての歓喜を知ったという。

以上のような作品の傾向、作家の経歴を考えれば、ウォートンの人と作品を「性愛の問題」を通して眺めることは、必ずしも無益な試みであるとは思えない。実際これまでもウルフの『言葉の饗宴』（オックスフォード大出版局、1977）や佐々木みよ子氏の『戦慄と理性 イーディス・ウォートンの世界』（研究社、1976）などウォートンの作品にみられる性愛のテーマに注目した専門書も存在する。そして何よりも、厳格なピューリタニズムに支配されたアメリカ社会において神経質なまでにタブー

視されていた「性」とそれを巡る問題をウォートンがどのように扱ったかを見ることによって、時代とその変化に対する彼女の姿勢を知ることができると思うのである。

そこで本稿では、ウォートン後期の作品、『母の償い』（1925年）を取り上げ、具体的に検討したい。この作品は、『イーサン・フロウム』、『無垢の時代』などに比べると言及される度合は非常に低く、前掲佐々木氏の本では一度も出てこないし、比較的丁寧はこの作品を論じているウルフの本でも15ページ程の長さで、他の有名作品が20ページ以上にわたって検討されているのと比べると、いささか見劣りがする（もっとも、この作品と「ベアトリーチェ・パルマート」との関連を指摘するなどこの本には示唆に富む記述は多い）。確かに、本作品は、後半部分が冗長であるなど出来はよくないかもしれないが、しかし、愛の肉体的側面など性愛の問題を取り上げている点、また変貌しつつあるニューヨーク上流社会の風俗をふんだんに織り込み、風俗小説としての様相も整っている点この二つがあいまってウォートンの時代への考え方を表明している点において作家ウォートンの特色がこの作品には集約されているように思われるのである。

(1)

作品の主人公ケイト・クレフェンは、見栄っぱりで魯鈍な夫と因襲的な姑との息が詰まるような生活から逃れるために、その家の弁護士ヒルトン・デーヴィスと駆け落ちしてニューヨークを脱出する。その後彼女はデーヴィスと別れ、今度はクリス・フェノウという年下の男と長期間同棲生活をしたが、そのクリスにも去られ、今では女中のアリーンと二人、リヴィエラでホテル暮らしをしている。ニューヨークを出奔してから既に18年が過ぎ、ケイトもすっかり中年になっている。

ある朝、ホテルの部屋に光が射し込み、ケイトが目を醒ます場面で作品は幕を開けるのだが、日の光に関連して作者は次のようなコメントを

つける。

ケイト・クレフェンにとって夜明けの光はもうたくさんだった。
それは失われたあまりに多くの喜びと結びついていたのだ。⁵⁾

実は今泊まっているこの薄汚ないホテルに関しても、夜明けの光が部屋の中に入ってこない、午前もかなり遅くならなければ光が入ってこない、この点だけはケイトの気に入っていた。では、これ程ケイトを夜明けの光に対して敏感にさせる失われた喜びとは何か。引用部分の後に続けて具体的に述べられるのであるが、それは「くたくたになるまで踊り楽しんだ舞踏会からの帰宅」であり、玄関の前での「思いがけないキス」であり、「しつこく自分の身体に絡まってくる男の腕をいなすこと」であった。ケイトにとっては、このような、夜通し歓楽に耽っては男に付き添われて朝帰り、という放埒な生活はもはや過去のものであり、彼女は今や愛人にも逃げられた孤独な中年女となり果てている。「夜明けの光」はその事実を否が応にも自分につきつけるがために「もうたくさん」なのである。

その日、ある人からスマレの花束を送られると（実はそれは、親切にしてやった不具の新聞売りの少年から贈られたものであるのだが）、ケイトはぼっと顔を赤らめて心中有頂点になる。彼女が顔を赤らめたのは、言うまでもなく「自分もまだ女として捨てたものではない」という喜びの感情の強さによるのだろう。

「夜明けの光」の例にしろ、この「スマレの花」の例にしろ、ケイトは中年を過ぎても女としての自意識を相当強くもっていることがわかる。ケイト、そしてウォートン自身が生まれ育ったニューヨーク上流社会の価値観では、女性は妻、母、社交界のホステス等の役割を課せられ、女としての自己主張、自己実現は認められていなかった。⁶⁾そういう事実を考えた時、上述のような傾向を示すケイトが、従来のニューヨーク上流

社会に対してもつ革新性が理解できるであろう。

ケイトのこのような女としての自意識は、主にクリスとの愛人関係とその破綻という経験に由来するものである。クリスは、ケイトの別れた夫ジョンとは違って、金銭や社会的地位などを軽蔑し芸術を愛する自由人で、彼女はこのクリスと出会ったことで、初めて「自分の魂の肺が空気で満たされたような気がした」のであった (p. 18)。しかし、常に新しい興奮を求めてやまないクリスは今を去ること3年1ヶ月前にケイトのもとを去った。女としての快樂と充実感を自分に与えてくれたのもクリスなら、女としてのプライドを踏み躪ったのも彼である。中年過ぎになっても女としての自分の魅力にこだわり続ける只今現在の彼女の心の奥底には、クリスとの、というよりはむしろクリスをその代表者とする異性との快樂に満ちた生活への絶ち難い思いがある。

スマレの花束に続いて娘のアンから18年ぶりに姑の死亡を知らせる電報を受け取ったケイトは、アンを年齢を思い出そうとするのだが、その時の彼女の心理描写の部分を途中省略を交えながらも引用する。

その電報が彼女の両手から落ちた。その手を使って今度は、もしクリスが33歳なら、可愛いアンはいくつになるのだろうかと指を折って数え始めた^④——いや、31だわ。クリスが31以上の筈はない。なぜなら自分はまだ42歳なのだから。……そう42歳……私はいつも自分に、自分とクリスとの間には9歳の開きがあると認めていたじゃないの。いや、11歳の開きだったかしら…… (中略) もし結婚して2年めの夏にアンが生まれたとしたら、アンは20歳近くであるに違いないわ。(中略)でもそうするとクリスはいくつになるのだろうか。彼はみかけよりは年をとっているはず……私はいつもそう思っていたわ^⑤。そう、こんな風に思われたこともあったわ。クリスのあの子供っぽい振舞は、自分達の間には実際以上の年の差があると私に思わせるための擬態なんだと。——秘密の目

的のために彼はそれを完べきに使いこなしたものよ^㉔。(中略)でも、もしクリスが31で自分が45だとすると、そうするとアンはいくつになるのだろう。⁷⁾

ケイトは、デーヴィスとニューヨークを出奔して後、娘のアンに一目でも会いたいと必死になった(pp. 16-17)。それ程熱心に思っていた娘の年齢を思い出すにも今やクリスを基準にたてなければそれができない(㉔)。さらに、話の重点はクリスと自分の年齢差の方にどんどん脱線していく(㉔)。㉔における「秘密の目的」(ulterior purposes)とは、もちろん同棲していた頃のクリスの浮気を指している。最後に強引に本題に戻るが、当初の疑問(アンはいくつだったか)は氷解しない。事程左様に、クリスと自分とのことに話が逸れていってしまうわけで、ケイトの心中では実の娘よりクリスの方に比重がかかっていることがここでは示されている。

それでは、ケイトは捨てられた後も一心にクリスを思い続ける意地ましい女性かというところではない。今は偶々愛情を取り交わす相手がないから一番最近、しかも長期にわたって関係をもった男のことが一番強く頭にこびりついているだけの話で、今の孤独を癒してくれる人が現われればたちまち身も心もそちらの方に任せてしまう。それがたとえ自分の娘であっても。

アンからケイトにあてた電報には、実は姑の死を伝えるもの他にもう一つあり、そこには「帰ってきて私と一緒に住んで下さい。娘のアンより」(p. 12)とあった。クリスに捨てられて孤独に苦しみ、愛に飢えていたケイトは、この優しい言葉をきっかけにアンへの関心を深め、今までのようにクリスを、ではなくアンのことを念頭において自分の行動を律するように生活態度を変化させる。次の引用は、かねての計画通り帽子を買いにケイトがある店に出向いた場面である。

しかし、いざ帽子が出てくると、それは以前試着してみたのと同じ物であったにもかかわらず、クレフェン夫人には愚かしくも若作りで、戯画的にすら思われた。自分はずっと10代の女の子のような恰好をしていたのであろうか。

「……娘の帽子より若々しい帽子で帰ったりしたら何て思われるかしら。もっと地味なのを見せてちょうだい……」⁸⁾

出てきた帽子が自分程の年齢の者が被るにはあまりに派手派手しすぎるとケイトは考えているわけだが、これはもちろん、彼女が自分の存在を娘アンとの関係で意識していることを意味する。しかし、その帽子は、紛れもなく彼女自身が以前に試着して気に入った筈のものであるから、クリスとの生活を忘れられずに夢よもう一度と男の気を引こうと必死で若作りを試みていたこれまでの彼女の生き方をもこの場面は読者に伝えている。先程の、アンの年を思い出そうとしてもついついクリスの方に思いが向かってしまうような心境から、この引用における自分をアンとのつながりのみで考える心境への変化は、同じ日のうちに、しかもアンからのたった一行の優しい言葉によって引き起こされたものであり、それを考えるとこの場面は、短時日のうちにこれまでの自分の行動方針や価値観を無反省に捨てて顧みない、ケイトの首尾一貫性のなさ、精神の未熟さ、意志力の弱さを示すものなのである。ジェフリー・ウォールトンがケイトの人物像について、“think”ではなく“feel”に傾く傾向があることを指摘しているが⁹⁾、要するにケイトは必ずしも理性的な行動をとらないということである。この点がまずケイトという女性の特徴的な性質の一つであると考えられる。

(2)

他者からの好意や愛情を希う気持が強いケイトではあるが、彼女はそ

の愛情関係を最終的には肉体関係に還元する。ケイトが求める愛とは「崇高」で「精神的」な愛ではなく、エロス、肉欲の類であることがやがて読者には明らかとなる。では、そういう例をいくつか見てみよう。

先程の帽子屋を出、さらに洋服屋での用事を済ませた後、ケイトは昼食をとる場所を捜す。

どこで昼食をとろうかしら。彼女は場末の静かなレストランを考えた。それから、群衆の後についていくといういつもの習慣と、大勢の見知らぬ人々と肩を触れ合わせる必要性 (the need of rubbing shoulders with a crowd of unknown people) と、その二つのために彼女の足は自動的にカジノの方に向かった。¹⁰⁾

寂しさを紛らわせるために自らを群衆の中に置くというのはごくありきたりの振舞であるが、その後にはわざわざ付加されている「見知らぬ人々と肩を触れ合わせる」という一句は、ケイトという女性のもう一つの特色を示している。“rub shoulders with”には「交際する」というイディオムとしての意味があるが、ここでは文字通りの意味にとりたい。クリスに去られた後、ケイトは群衆の中に身を置いて見知らぬ人々と肩を触れ合わせることで肉体の無聊をいささかなりとも慰めていたのである。わざわざ挿入された“need”という一語が、肉体を求める彼女の内なる衝動の強さを伝えるものとなっている。話はかなり先に進むが、セントラルパークでクリスとケイトが久々の対面を果たした時の様子を引用させて頂きたい。

“But I’m glad to see you,” he added; “just to *see* you,” with a clever shifting of the emphasis.¹¹⁾

“see”に強調をおくクリスの口調は要するに「あなたとは会えるだけで

結構」というニュアンスであり、「(昔そうであったように) それ以上のものを求めるつもりはない」ということを言おうとしているのである(この時既にクリスはアンと結婚の契りを結んでいる)。ということつまり、過去ケイトとクリスの間には相当濃密な関係があったことが類推されるわけである。先程の「肩を触れ合わせる必要」もそれとの関連で理解されるべきである。18年ぶりのアンからの便りという新たな事態について静かに考えてみようと思っただけであろうが、それも肉体の要求に屈してしまう。理性の力に弱く、肉体の要求に旺盛なケイトの傾向がここで端的に示されているといえよう。尚、pp. 56-57には、ケイトが自分のクリスとの過去をアンの後見人(アンの父は既に死んでいる)フレッドに告白しようとして、その時偶然部屋に入ってきたアンの“caress”によってあたかもろうが融けるように気力が萎えてしまう場面があるが、これなども理性より肉体の方がまさるケイトの傾向を表わしたものと見える。或いは5)の引用に関して、ケイトが過去(もっと具体的に言えば「自分の家にクリスが入ることを許していなかった頃」(p. 4)の快樂として思い出しているものの中にも「キス」とか「男の腕」とか肉体と肉体の接触を表わすものがあったことを思い出すべきであろう。

この肉体の欲求こそが人間としてのケイトの存在の根底をなすものである。そして、実の娘アンに対してもそういう気持で臨む。そこにこの作品の特異な点があるのである。

約20年ぶりで故郷に帰ったケイトは船上で娘のアンとの対面を果たす。その時の彼女の心理は次のように描かれている。

“My Anne…little Anne…”

She thirsted to have the girl to herself, where she could touch her hair, stroke her face, draw the gloves from her hands, kiss her over and over again, and little by little, from that tall

black-swathed figure, disengage the round child's body she had so long continued to feel against her own, like a warmth and an ache, as the amputated feel the life in a lost limb. ¹²⁾

これは長年離れ離れになっていた娘と再会できたケイトの喜びを表わしたものと見える。ただここでも、ケイトの愛は徹頭徹尾肉体を通して表現される。髪や顔を撫で、手袋を脱がせて（つまり地肌に）何度もキスの雨を降らせる、しかも二人きりでいられる所で、というのでは否が応でも肉欲をイメージさせられる。最後の the amputatedと a lost limbの喩えも母が娘のことを可愛く思って抱きしめることの比喩としては少々異様である。母と娘の一体感といってもケイトの場合、そこには精神的なものは乏しくもっぱら肉体の一体化としてのみ意識されることをこのイメージは語っているように思うのである。ケイトにおいては、母と娘の間の愛もこのように肉体の関係として捉えられるのである。

こうして久し振りに我が家に戻ったケイトは、アンに案内されて自分の部屋に入る。しかし、アンは、母親が長旅でさぞや疲れているだろうと思ってあまり長居をせずに軽くキスをして部屋から出ていく。一人部屋に残ったケイトはそのことを思い出しながら床に入るのだが、次に引用するのはその場面である。

「あの子は完璧だ」とアンは母は思った。少しぎくっとしながら…。

彼女は「死ぬ程疲れたわ」と一人ごち、ガウンを着、うろうろしているアリーンに行くように命じて火の傍に横になった。それからドアが閉まり、静けさの中で、自分が何と興奮しているか、寝るのはとても無理だと思った。

彼女の目は変わらぬ光景を一渡り見直し、同じく懐しい向こう側の寝室に向かった——それはかつての「最高のとおきの部

屋」だった。そこでは、ダブルベッドの上に、昔と同じ赤い目をしたベアトリーチェ・チェンチ像がかかっていた。¹³⁾

アンから受けたキスの刺激を思い出しながらの発言であるから、「完璧だ」はケイトの意識に上っている限りではアンの細やかな心配りに対する気持ちであるが、無意識の次元では、キスを通じて感じ取ったアンの肉体的成熟に対する思いをも意味しているのではないか。「ぎくっとした」(frightened)のも、それに対する本能的な驚き或いは嫉妬のためではないか、とそんな深読みをしたくなる。文末に付された……が、この一節に字面に表われている以上の含みがあることを示しているように思われるのである。そういう深読みをしたくなるのも、ケイトが寝床で目にしたベアトリーチェ・チェンチ(Beatrice Cenci)像による。この絵はイタリアの画家グイド・レーニ (1575-1642) の手になるもので、16世紀イタリアのいわゆるベアトリーチェ伝説を素材にしている。これは、父親に凌辱された娘ベアトリーチェが、継母、兄弟、愛人と共謀して刺客を送り込んでこの父親を殺させるという近親相姦の話なのである。寝床にいるケイトを見下ろしているこの絵は、彼女の今の心境を具体的に示す一種のシンボルとしての役割を与えられているのではないだろうか。

話の展開を先取りして言うと、これから先娘のアンが自分の結婚相手としてかつてのケイトの愛人クリスを連れてくることになり一悶着あるのだが、これを指してある批評家はこの作品の主題を「一人の男を母と娘が取り合うこと」と規定している。¹⁴⁾しかし、話はそれに尽きるものではないと思う。これまで見たように、娘に対するケイトの近親相姦的ともいえる肉欲的愛情を見逃してはならないと思う。ケイトは自分の娘をも、かつてクリスを愛した時と同様の女としての目で見ていたのである。

(3)

これまで主人公ケイトの精神性の稀薄さ及び彼女の内に潜む肉欲への強い衝動をみてきた。ここでは1925年というこの作品が出版された年に注目し、当時の社会状況とこの作品との関連を考えてみたいと思う。

19世紀末以来、アメリカは「お上品な伝統」と呼ばれる厳しいピューリタン倫理によって支配されており、性に関しても品行方正を求められていた。女性は素肌をまったく人前に見せず、手首も踵も覆い隠していることを求められた。さらに女は性的な欲求などまったくもたない、というよりそんなものは知りもしない、いわばsexlessな存在であることが要求されていた。¹⁵⁾

こういう厳格なピューリタニズムも、20世紀に入って社会が都市化、工業化するに従って次第に崩れ、性風俗も自由化されてくる。特に第一次世界大戦によって伝統的な価値秩序が崩されたことは、その自由化をいよいよ決定的なものにした。

1) の引用でウォートンは風俗小説家であると規定されているが、その点はまったく正しく、この『母の償い』においても時代を表わす風俗の細部が丹念に描き込まれている。特に、ウォートンがこの作品で描いた風俗が、20世紀における性風俗の自由化の指標として亀井氏があげているもの¹⁶⁾とびたりと一致することは興味深い。

性風俗自由化を促進したものとして亀井氏は水泳その他屋外スポーツや自動車の普及をまずあげる。これらはいずれも女性の意識を解放的にし、服や下着を簡素で楽なものにすることになった。本作品ではこれらについては、ロングアイランドでのドロヴァー家のパーティーに集う人々が行ったゴルフやテニス (p. 227)、また同家が所有する複数のリムジンカーなどとして言及されている。

さらに現象面では、第一次世界大戦後の服装の変化が重要であろう。戦争は女性の社会進出を進め、服装をますます実用的なものにし、つい

にスカートのすそが上がり始めた。ニューヨークに戻って以来初めてクリスに会った日の晩、寢床でケイトが目にしたファッション雑誌は、その年の春にはスカートが短くなるであろうと告げている (p. 119)。

1920年代に入ると女性の立居振舞は増々派手になり、フラッパーという厚化粧で煙草を吸い、禁酒法も無視して酒を飲み男といちゃつく奔放な若い女性が登場した。ここではケイトの姪、アンの従姉にあたるリラ・ゲイツがそういう女性として描かれている。彼女は卑俗な言葉を使い、煙草の匂いをぶんぶんさせているのであるが、パーティーの途中で男が車で迎えに来て、そのままいずこともなく消えてしまう (pp. 70-71)。再び亀井氏によれば、自動車は若い男女のデートの手段であり簡便な性体験の場であった。そういった事情もあって、離婚率は、1920年代になると前の10年代と比較して急増の傾向を示す。

グレイス・ケロッグは、『母の償い』が当時の一般読者にうけたのは「母としての責任感のために複雑化する離婚の問題、いきりたつて娘をひどい現実から守ろうとする母親の問題、という二つの時宜にかなった顕著な問題を追求したことによる」と言っている。¹⁷⁾要するに当時の乱れた性風俗との関連でケイトを理解し、この作品を読んだということである。確かに上述のふんだんに描き込まれた風俗を1925年当時の読者が目にすれば、自分達が今その中で生きている、性風俗が目立って弛み始めた社会の雰囲気を感じ取ったと思う。夫や子供を捨てて駆け落ちを敢行し、女としての強い自意識をもち、人間の肉体面、また近親相姦をも匂わせるケイトのことをウォートンは性風俗が自由化に向かうこのような新時代のさきがけとして意識していたのではなからうか。ケイトは一昔前の人間であるが、彼女のこれまでの行動や心理は1920年代の、変わりつつあるアメリカ社会そのものであるとあってよい。彼女は、肉体を卑しめ、ひたすら精神の純粹性を求める従来のピューリタニズムの伝統をふみ越えた新しい時代を先取りしていたのである。

(4)

しかし、注意せねばならぬことは、ケイトはその心理傾向や衝動から新時代のさきがけであるとはいえ、新時代に生まれ育った生粋の新時代人とは違うということである。ピューリタン倫理がやかましかった旧時代には新時代的行動でそれに対抗した彼女だが、作品に描き込まれているように新時代が現実のものとなった時、それに全面的に親和することができたであろうか。¹⁸⁾

ところで、ケイトのように、旧時代のピューリタニズムに反発し、同時に時代の変化とともに否応なく新時代の風俗の中に投げ込まれた女性といえば他ならぬウォートン自身がそれにあたる。実は、戦争中奉仕活動をし後に“Reconnaissance Francaise medal”を授与されたというケイトの経歴 (p. 14) はそのままウォートンのものでもある。このような細かな事実関係の類似は、ウォートンがケイトに自分自身を投影させていることを暗に示すものである。20年代の新しいニューヨークでこれからケイトがどのように思い、行動するかは第一次世界大戦後のアメリカ社会に対するウォートンの姿勢をそのまま反映していると考えられる。

アンが自分のかつての愛人クリスと結婚するつもりであることを知った後のケイトの行動は混乱を極める。もしアンが真実を知れば当然彼女は傷つくし自分も軽蔑される。だから真実を告げずに何とかクリスをアンのもとから去らせようと思い、脅迫まがいのことをやって彼をニューヨークから追い出したり (p. 176)、それでもアンがクリスを呼び戻すと今度は徹底的にアンの傍にへばりつきクリスがいたたまれないようにしてやろうと考えたりする (p. 244)。しかし、純粹にクリスを愛し、また母親とも別れたくないというアンの高潔さに打たれたケイトは、最後にはアンの結婚を受け入れよう、それが母親として自分がとるべき道であるという気になる (pp. 275-276)。

読者は、ここまでのケイトの行動は、激しく自分が愛している娘をと

られたくないという女としての思いに発するものであるにしろ、母親としての思いやりに発するものであるにしろ、いずれにしても娘への愛情にもとづくものであるという印象を抱き続けるであろう。ところが、最後になってその印象はひっくり返される。ある日ケイトは、アンの部屋で、クリスがアンの身体に手を回してまさにキスをせんとしている所を目撃し、まるで自分自身がクリスに抱擁されているような気分になり身体に熱いものを感じる。「そんなばかなことが」と叫びそうになり、二人に気づかれぬように急いで部屋を出た彼女の興奮した心の内は次のように述べられている。原文ではWas she或いは Was that がたたみかけるように繰り返され、恐ろしい自己発見の衝撃が切迫感をもって伝わってくる。

定かならぬ興奮が彼女の頭の中に湧き上がった。すべての思考と感情の働きが分厚い、からみつくような記憶で妨害された。嫉妬？ 私は娘に嫉妬していたの？ 娘の肉体を嫉妬していたの？ それが私の反感や本能的な嫌悪感を解く秘密なのかしら。最初から何か近親相姦的な恐怖が自分達の間にあるように感じられたのはそのためかしら。(中略) 彼女は自分とアンやクリスとの間に世界を置いた程の距離を置かなければならなかった。いや、全世界を自分たちの間においても十分ではなかった。墓ですら、この光景を塗り消すのに十分黒いとは思われなかった。¹⁹⁾

今まで必死になってアンとクリスの仲を裂こうとしたのは思いやりによるのではなく、かつての自分の愛人をものにしようとしている若い娘に対する嫉妬によるものであったとケイトは自覚しているのだが、正直いってこの筋の展開は唐突である。ただここで重要なことは、ウォートンがケイトの内にある肉体への衝動を読者だけでなくケイト自身に知らしめている。しかも死によっても償えない程の許されざる罪として自覚さ

せていることなのである。これ以後、今まで肉欲にまさっていた筈のケイトがにわかには精神性、倫理性を獲得していく。

ケイトがニューヨークを去って以後ずっとアンの後見人を務めていたフレッドは早くからケイトに思いを寄せており、彼女の方でもそれに応えてアンの結婚後は彼と二人で暮らそうと思っていた。しかし、正直なフレッドを欺いたままではいられない。結婚できるできないにかかわらず言わねばならないと思ったケイトはクリストとの過去を洗いざらい告白する。それに対してフレッドは「時がたてば忘れられる」と言って (p. 325) 彼女の前に立つ (もちろん抱擁しようと思って) が彼女は応じない。

“Not now—not now!” She caught his hand, and just laid it to her cheek. ²⁰⁾

その後、今日はもう帰ってくれと言いフレッドを玄関まで送る。

“And now you’ll rest?”

“Now I’ll rest”

With that—their hands just clasping—she guided him gently to the door…²¹⁾

この二つの引用文では“just”がきいている。「ただ彼の手を自分の頬につけただけ」、「ただ手を握っただけ」と繰り返すことにより、「今までのケイトだったらもっと先までいったらろうに」という含みをもたせ、彼女が肉欲に打ち克つだけの道徳性を身につけたことを示しているからである。事実、翌日彼女は誰にも告げずにアリーと二人でニューヨークを去り、フレッドからの再三の帰国の誘いも断わってストイックに漂泊の旅を続けることになる。

ケイトのこの急転回は、先程も言ったようにあまりに突然である。佐々木みよ子氏も、ウォートンの作品中の人物について、「性的強迫観念に取りつかれた者から、靈的慈悲心への変化はやや唐突である」と述べており、²²⁾この点では筆者と同様の感想をもっておられるようだ。ただ筆者は、その弛んだ性風俗が作品中に細かく描かれているような新時代のニューヨークにケイトが結局とどまることができなかったという事実に注目したい。離婚、クリスとの深い関係、娘アンへの愛、それがいつのまにか変形して生まれた嫉妬、これらすべての局面においてケイトの中では精神よりも肉体的な動機の方がまさっていた。ウォートンはケイトに、自分の内に存在するこのような肉体への衝動、言い換えれば新時代的属性を認識させ、そういう自分は悪なる存在であるという倫理感に目醒めさせ、自ら償いをする道を選ばせた。先程述べたようなケイトとウォートンの類似を考えると、ケイトが新時代に親和することができずにニューヨークを去らねばならなかったというこの作品の筋立ては、到来しつつある新時代に対するウォートン自身の思いを反映しているということができないのではないだろうか。一番最初に述べたように、ウォートンはニューヨーク上流社会の厳格なピューリタニズムによって女としても芸術家としても抑圧を受け、嫌悪と反発を感じていた。しかし、だからといって旧来のピューリタニズムによる秩序を打ち壊すような新しい時代にもついていくことができなかった。新旧どちらの時代にもついていけずに、ちょうどその狭間に落ち込んだウォートンの孤独が、一人漂泊の旅を続けるケイトの孤独な姿に重ね合わされているのである。

(5)

ローレンスの『チャタレー夫人の恋人』の無削除版が出たのが1960年のことであるから、1925年という出版年を考えるとこの『母の償い』は人間の肉体への衝動を扱った点で疑いようもなく新しい。しかも本作品ではそういうテーマが赤裸々な性描写ではなく、人間心理の奥に潜む衝

動として描かれているのでそれなりの深みも出てくる。しかし、前章でも述べたように、それは最終的には悪として裁断され、後に残るのは空しい漂泊の旅である。そこには『チャタレー夫人の恋人』の結末部分にみられる充実感と希望はない。1925年、新時代が幕を開けた時、ウォートンは63歳だった。やはり過去の人であったというべきなのだろうか。

註

- 1) 『英米文学辞典』(研究社、1985)、Whartonの項より引用。
- 2) R. W. B. Lewis, *A Biography of Edith Wharton* (Constable, 1975)所収。
- 3) *Ibid.*, p. 544.
- 4) *Summer* (Perennial Library, 1979), Introductionを参照。
- 5) *The Mother's Recompense* (Virago Modern Classics, 1986), p. 3. 以下本文中のページ数の指摘は本書のもの
- 6) Ann Massa, *American Literature in Context IV* (Methuen, 1982), p. 7.
- 7) *The Mother's Recompense*, pp. 10-11.
- 8) *Ibid.*, p. 20.
- 9) Geoffrey Walton, *Edith Wharton, A Critical Interpretation*, (Fairleigh Dickinson University Press, 1982), p. 147.
- 10) *The Mother's Recompense*, p. 21.
- 11) *Ibid.*, p. 115.
- 12) *Ibid.*, p. 37.
- 13) *Ibid.*, p. 45.
- 14) Judith Fryer, *Felicitous Space* (The University of North Carolina Press, 1986), p. 128.
- 15) 亀井俊介『ピューリタンの末裔たち—アメリカ文化と性』(研究社、1987)、pp. 61-62.以下本稿におけるアメリカの性風俗に関する記述はあけて本書による。
- 16) 前掲書、pp. 146-154.

- ¹⁷⁾ Grace Kellogg, *The Two Lives of Edith Wharton, The Woman and Her Work* (Appleton Century, 1965), p. 267.
- ¹⁸⁾ 結論からいうと親和できていない。ニューヨークに戻ったケイトはその変わりように驚き、時々「自分は前の時代の人間だ」と思ったり (p. 44)、新時代の奔放さに反発を感じたりする (p. 62)。
- ¹⁹⁾ *The Mother's Recompense*, p. 279.
- ²⁰⁾ *Idid.*, p. 326.
- ²¹⁾ *Ibid.*, pp. 326-327.
- ²²⁾ 佐々木みよ子『戦慄と理性 イーディス・ウォードンの世界』(研究社、1976)、p. 145.